会　報

第 5 号

浪花百景のうち 梅やしき

（一養斎芳瀧）

京都大学地理学談話会

1994

+++++ 寄稿 +++++

「企業内生活三十余年」を送って

松田常志（昭和３８年卒）

卒業後三十一年が過ぎた。卒業時、学部や専攻からは少数派として一般企業に就職した。そして、現在ではもはや「卒業して何年」ではなく、会社生活を終えるまでの時間がつい目前という時期である。嘘。

遠い過去を思い起こすと、四回生になり卒業論文に懸命になる一方で、卒業後の選択では人並に悩んだ。院進学か、企業への就職か。企業なら少しは「地理学」に近い企業（今から思えば幼稚かもしれない）か、いや、日頃から多少興味のあった商社や新聞社、或いは私鉄のいずれにするか。当時は、特に文学部の学生には碌な情報がない。加えて採用シーズンも不定で、焦点の合わせようもないのだから、対象の企業を前にその時がきて急に慌て、悩み、するのだから‥‥。何年も経って、結局就職の道を選んだ思考の真のプロセスは、自身もよくわかっていなかったことを自覚した。

現在の様子は、三十余年前の文学部から就職する少数派の状況とは、当然だが大変異なっている。就職への誘いも、三十年前には想像もできなかった「至れり・尽くせり」だ。それだけ、企業・文学部の学生の双方に、就職についての意識が開かれてきたのだろう。それでも、私はまだ充分ではないと思うのは、率直に言って、文学部からの企業への就職は、まだまだハードルは高いのが実情だ。

しかし、企業で仕事をする限り、文学部出身だ、いや地理学専攻だということは、（私の細やかな経験からは）ほとんど無関係だと思うが、この辺りは経済界にも徐々に広く理解されて来ており、そのように変化して来ている。ご承知のように、経済全体がここ二十年程の間に、第三次産業に大きく傾いて来た為、従来の法・経系以外の文系の人にも活躍の場が増えて来たこと。経営者も、変化の激しい時代や社会に即応した経営には、従来の供給源以外の人材から新しい発想を得ようと考えざるをえなくなった事情もある。学生の側にも、専攻に拘らず、社会に出てからの各種業務に対応しうる能力を、自己啓発している（アルバイトも有力な方法か）こともある。

ただ、三十年余りの大半を人事・総務の畑で過ごして来た者から見て、文学部出身の人達にも企業への門戸が大幅に開かれて来てはいるが、そこに迎えられる人を個人として見る時、企業活動にとって、どんな局面にも積極的かつ有効に対処する基本的資質に優れていることが、あくまで前提であると言える。いわゆる「文学部の中でしか生きていけぬ」タイプ（これを気質で片づけて良いのかどうか、今でも疑問に思っている）の人では、やはり企業はその採用を躊躇することになる。私も含めて、「一般に文学部の人は」と気易く分類されるのには、少なからず反発する。曰く、ロマンチスト、数学が苦手、対人関係も不得手など。しかし、そんな要素だけで企業が人を使うことはないので、いずれの場合も程度とバランスと、最も大切なのは自己の欠点を改良しようとする謙虚さと努力と誠意ではないかと思う。

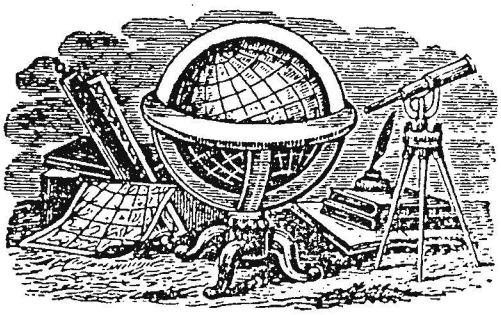
抽象的な話はこの辺りにして、三十余年を具体的に振り返ってみると、一体この長い時間、「何を・何の為に・どのように為し、そしてその結果は」と自らに問うてみるに、具体的かつ明快に答えることが出来ず、内心忸怩たるものがある。仕事の性格で分類すれば、三十年のほとんどを、人事・教育・総務・厚生の業務に当たった。（入社当時、一年余りの運輸現場は車掌・運転士をやり、社会での振出としては、少々手荒いが面白かった。）業務の性格からはそのように分類できても、業種が異なると、同じ人事や厚生の仕事もはなはだ勝手が違う。約四年間在籍し、開業業務を担当したホテル、即ちサービス業の人事・厚生などの業務の裏側の厳しさには、目の覚める思いがした。この一年余りの流通・飲食業でのそれも、また一段と厳しいことを知った。

しかし、何といっても「人を採用し、育て、評価をする」一連の仕事は、自身を苦しめてもくれたが、それ以上に自身を鍛え、育ててくれたのではないかと感謝している。人を相手にする仕事は、時に自身をのっぴきならぬ境地に追い込んだりする。自らの人間としての修養が足りないのだろうと思い、ある時から東洋古典をあらためて繙き、今でもそれは大いに心の支えとなっている。

私にとって京大在学時の最大の成果は、師であり友を得たことである。師は恐縮なので、控える。友は同じ専攻の人は当然としても、仕事以外のつき合いとして文学部の教養時代の友人達とは、卒業以来常に意を用いて、ずっと交わって来た。大半が学者、「少数派」にマスコミ、商社、宣伝広告、出版、僧侶、など。単なる知的好奇心に止まらず、時には仕事や人生の価値体系にまで踏み込んで刺激される。何度も仕事に新鮮なヒントや反省のきっかけを得た。時には、人生をより豊かにしてくれたと感じることもある。

さては地理学専攻であったことを忘却しているのではと疑われるかも知れない。決してそんなことはない。なぜなら、地理学が好きであることの根元は何も変わっていないのであり、小さくは日常生活（例えば、旅に出かけようとする時）や日常業務にも何かと、その考えやあり方を生かしていることに自分で気付くことがある。そしてふと、そのうちに一つ日頃の蘊蓄を傾けて、人文地理学の論文を物しようかと（夢は持つほうが良かろう）、思ったりもする。紛れもなく、元地理学徒見習いだと秘かに考えている。

企業生活三十余年生の文であり、言は企業に限った。しかし、逆に私はいつも、こうも考えている。我教室の皆さん方が、人文地理学の将来を担っていく人達であることも確かなこと。企業社会での貢献も大切だが、学問の発展に寄与することもそれ以上に大切。要は信念と自信に裏付けられた志をもって、それぞれの道を選択されることを希望して止まない。



◎ 講演会の報告 ◎

1993年11月12日文学部博物館において談話会秋期講演会を開催しました。石田寛先生と山崎孝史さんに発表していただきました。簡単に内容をご報告いたします。

私のレキシコン
－conceptsとterms－

石田寛

これから私がお話申し上げますのは、４冊からなる「私のレキシコンシリーズ」の第１冊目が中心であります。たくさんの外国語を並べているわけですが、大体は私の手持ちの、今までエリアスタデエイーズで出くわし大切にしている言葉です。一つ一つが思い出のある言葉です。

今日の話はコンセプトとタームということで、コンセプトを私も一応「概念」という日本語をあてましたけれど、概念という言葉になってしまうと英語本来のコンセプトがもっているものと多少違ってくる。どこの国の言葉でもこれが完全にオーバーラップすることはありえないので、なるべく英語と日本語がうまく重なるように言葉を選ばなきゃいけないので苦労しています。私たちがコンセプトというのはどちらかと言えば抽象的なもので、思想的なもの、アイデア、プランという意味があります。それに対してタームというのは極めて厳重な意味をもっています。私がここであげているのは普通の言葉ですが、その中で特定のものをとっています。例えば‘way’というのはいろんな意味に使われますが、「道路」とかいう意味ですと私のレキシコンには40行あります。

何がきっかけでこんなふうに言葉を集めだしたかということですが、私は日本でのことを外国語で書くように努力してまいりました。そしてどんな言葉で書いたらいいか本当に苦労した。例えば最初から最後まで私と深くかかわりあいをもっているのが、‘grazing’という言葉です。「草を食べさす」という言葉で、私のレキシコンでは三段の構造になっていて23行あります。ところが字引をずっとみますと、ロングマンでは全然この言葉はあらわれておりません。それからコービルドでは３行、アメリカンヘリテッジでは１行というふうにほとんど一般の字引には出てまいりませんが、私にとっては大切な大切なタームでありキーワードです。日本の中国山地の野草地牧場を英語でどう言ったらいいかということに本当に苦労して、ニュージーランドでああだろうか、こうだろうかといろんな外国人と話している時に、それは‘rough grazing’がいいのではないかと意見が一致しまして、私はそれ以後使うようにしております。

それから私は放牧の形態として、牧童がついてずっと歩く牧童型放牧と、牧童ではなしに垣をする柵垣型放牧という二つを提案しておりました。そして牧童型放牧が古い一般的な形で、それから柵垣型放牧がでてくるんだという見解をもっております。そのことを書いていたところが、アメリカ人の、ここの非常勤講師もされていたエアーさんから「石田は‘cowboy’と書いているが、日本のそれは‘cowherd’とすべきだ。」とサジェスチョンをいた

だいて、それ以後ありがたく‘cow herd’という言葉を使っております。一つ一つにそういう思い出を込めて書いております。

それで術語構造で、一つの見出し語がありましたら、それが上位概念ないしは私の研究カテゴリーではどこにあたるのかを決めるのが大きな仕事です。類似語、対照語をかなり考えてきました。例えば‘house’という言葉に対して、ｃｆ．として‘home’と‘family’というのを入れています。これはイギリスだと大名家以上は‘house’といい、家老以下は‘family’という。ところがアメリカ人はあまり区別しない。また‘period’と‘era’にしましても、イギリス流だと歴史の輝ける時代は‘era’という。‘Victorian Era’とか‘Meiji Era’と。イギリス人はこれを厳しく言います。ところがアメリカの歴史家と話しをしていますと、「へえーそんなことかなあ。みんな‘period’だ。」と言ってアクセントをおかない。

それから‘flaming bush’というのを書いておりますが、これも苦労した言葉の一つです。夕焼け現象の美しいのに魅せられて、これを英語で何て言うのかとイギリス人に訊ねてみたところ、言葉がでない。いろんな人に訊ねてみてやっと文学者が「シェークスピアが‘flaming bush’と言っております。」と言ってそれをいただいた。我々の夕焼けほど彼らのパーセプションには出てこないのです。

動植物の語彙も書いておりますが、例えば日本では近ごろ「ツナの缶詰」と言います。ポリネシア語で大型の魚のことを‘tuna’と言いますが、日本ではこれがもっぱらマグロ、ニュージーランドではウナギになっている。またイカというのは、日本ではイカ、タコのイカですが、ニュージーランドではサカナということです。外国を出歩いていますと、このようないくつかの言葉がインドネシア、ポリネシア、日本なんかで色々感じられるのです。

さて最後に‘farming’、農業をのせていますが、非常に行数の多いもので、術語構造もかなり複雑になっています。‘full-time farming’、それから‘part-time farming’に大きく分けられ、その次に‘economic farming’と‘uneconomic farming’としています。その中にも個人農業とか協業農業、会社農業、法人農業とか趣味農業などいろいろあります。日本のセンサスで専業農業と言われているものの中には、老人農業、それからスペアタイム・ファーミングが非常に多いです。それから兼業農業の中には、私のようにホビー・ファーミングが非常に多いです。私の村をみてみると、大部分がスペアタイムかホビー・ファーミングです。コメが自由化したら一体どうなるかというわけですが、ほとんど問題ないだろうと。後継者の問題はどうかというと、趣味農家くらいだといくらでもいるという現状です。

それで私のコンセプツはと尋ねられた場合の答は、「農業栄えて国滅ぶ」ではいけないということです。農業はなるほど頑張ったけれども、経済全体が駄目になってしまったという方向には加担しない、と思っております。こんな形で私のレキシコンを、これは私の自己実現のつもりで作っています。

明治期における中心集落の経済的基盤
ー福岡県町是の検討からー

山崎孝史

明治近代の空間構造に関心を持っておりまして、今回は経済的な面について報告させていただきたいと思います。地理学、近世の歴史学および歴史地理学、それから経済史学の研究を整理しますと、いくつかの問題点が指摘できます。まず近代特有のもの、近代の意味を明らかにしていく必要があるということ。そしてそのためには近代における地域社会秩序を明らかにしていかなければならないことです。それから地理学から指摘できる問題として、広がりを持った空間を視角にいれて一点世界観を克服していく必要があるかと思われます。それで今回の発表の基本的概念として近代日本における「二重の階層分解」というものを持ち込んで分析を進めたいと思います。農民層分解というのは社会的な垂直的な階層分解ですが、私はそれに都市的なものを射程にいれて、商業と農業の分化、中心集落と周辺農村の関係を空間的な階層分解という概念でとらえていけるのではと考えたわけです。

資料は「町村是」を使います。これは町村経済の改革計画書で、地方産業振興運動から生まれてきたものです。福岡県では明治25年と31年に町村是調査が実施されていますが、もっとも早く実施された浮羽郡吉井町と八女郡福島町を対象地域とします。明治期にはいずれも郡役所の所在地で、また銀行が立地するなど各郡の政治経済上の最上位中心地として位置づけられます。町の産業構造についてですが、吉井町の場合は兼業が主体で半農半商的性格が残っていることがいえます。逆に福島町は商業が独立している、しかも業種数が多様で地域産業や特産品の流通とかかわった固有業種がたくさんあります。それから会社や時計商など近代的性格がみられ、マチとして純化した構造を持っているといえます。

次に中心集落としての機能をみたいと思いますが、まず産業の集積と生産品の流通について検討したいと思います。商収益上位の業種を見ますと、金融、高級品、嗜好品などの供給の地域的拠点だったことがわかります。それから農産物、農産加工品の流通拠点でもありました。流通形態の特徴については、呉服、清酒、米、雑穀や吉井町における醤油、蠟、福島町における紙、茶をあげておりますが、仕入先における郡外のウエートや販売先における郡内のウエートなどが異なっています。財の種類により集荷圏と販売圏が変化しており、特に販売において郡外市場と結びつくような業種の収益が非常に高いことがわかります。つまり中心集落の主要産業は背域の生産に強く依存していて、背域の消費市場としての地位は相対的に低かったと考えられます。

次に商品作物生産と商人資本の成長といった問題について考えたいと思います。吉井町の蠟商人の場合は、近世の早い段階で製蠟業者として農民から分離しております。そして幕末から明治にかけて徐々に蓄財をしていきまして、農民に高利貸を行っております。農民が没落していくプロセスの中で製蠟業者が地主化していく形態がみられます。これに対して福島町の場合ですが、近代の段階で農業副業として茶、

楮生産から製茶、製紙業が一貫して行われていたと考えられます。吉井町のような生産過程の分化と商人資本の産地支配はあまり見られなかったようです。二つの郡はちがった商人資本成長のプロセスをとげたのではないかと思われます。

近代における中心集落の機能の一つとして、土地の集積が見逃せません。そこで町外の土地所有の特徴ですが、地目の割合を見ますと明治30年前後の段階ではかなりランダムに集積されていたと考えられます。ところが40年の第２回調査では町外土地所有地がかなり増えているわけです。この変化は、土地取得に選択的指向性があらわれてきたこと、これは小作料をいかに取得するかという目的のもとに地主が土地を戦略的に集積した結果ではないかと考えられます。つまり基本的に寄生地主的土地所有としてとらえることができます。そこで５町を超える土地所有者の社会的分布と空間的分布をみますと、浮羽郡の田と八女郡の畑において地主上層が土地を占有しているという形での地主制の展開がみられます。ところが空間的分布については、浮羽郡の場合は商業機能の高い町に大土地所有者が集中分布しています。それに対して八女郡では郡西部の町村にまんべんなく居住しています。地主制の進行と中心業務の土地集積が並行するような形態、「二重の階層分解」が浮羽郡において確認できたといえます。

それから土地集積に関連する機能として、土地集積をした地主がその現物小作料を転化した資本の集積を分析する必要があります。吉井町の場合は、卓越する水田の集積は米を集積することになります。それが酒造業や穀物商を通して広い市場へ販売されていくというプロセスになっています。ところが福島町の場合は畑、これは山林が多いのですが、その山林の集積の結果得られる林業地代はあまり進んでいなかったようです。したがって材木商も戸数を減少させたり収益を減少させたりと停滞傾向がみられます。

以上の分析から、浮羽郡においては「二重の階層分解」の形態があらわれてきている。資本の集積と生産基盤を喪失していく階層の存在が確認できるわけです。それに対して八女郡では地主制の進展はごく部分的であって、商業を含む諸産業の状態もむしろその地域経済の性格に対応したものが見られる。この差異がさらに各郡の地域社会秩序にどうつながっていくのかが次の課題になるわけでして、今後さらに研究を深化させていきたいと思います。

浪花百景のうち吉助牡丹盛り
（南粋亭芳雪）

☆研究室のページ☆

本年度は応地利明教授が東南アジア研究センターへ、山崎孝史助手が山口県立女子大学へ転出されました。また14名の３回生と１名の聴講生と事務の喜多野宣子さんを迎えました。簡単に自己紹介をしてもらいます。

【三回生】

…足立　理…

４組出身の足立です。奈良県民なので、足には自信があります。そのかわりと言っては何ですが、目がかなり悪いので、すれ違っても気づかない事があります。その時は声をかけるなり殴るなり蹴るなりしてください。

…安福伸光…

自然と人間との一番いい調和の仕方に興味があって地理学を選びました。普段は外に出るのが好きで、徒歩、自転車、車でウロウロしてます。特にぼんやりと海を眺めながら浜辺にたたずむのが好きです。

…岩田憲司…

私は奈良県生駒郡三郷町という新郊住宅地の出身です。斑鳩町に隣接しているため、法隆寺も比較的近く、昔はよく遊びに行きました。また奈良市街にある高校に通っていたため、古都開発の難しさを目の当たりにしました。それ故、都市の再開発や都市景観問題に興味を持つようになり、京大の地理学科にきました。一所懸命勉強しますのでよろしくお願いします。

…遠藤　元…

文学部４組から来ました遠藤元（はじめ）です。出身は千葉県立船橋高校です。バトミントン部に入ってます。練習、試合で忙しく、甚だ不勉強ですが、今年からは心を入れ替えて頑張ろうと思いますので、よろしくお願いします。

…柴田聖子…

東京都出身です。授業より何よりオーケストラの活動に力を入れていたわけですが、今は文学部とオーケストラの練習場所と下宿の一辺 500mの三角地帯に収まる世界で生活しており、20才にして運動不足が気になる毎日を送っています。

…島崎郁司…

田辺町から１時間半かけて通っています。充実した忙しさのある１年を送りたいです。ふらふら出歩くのが大好きです。この教室でソフトボール等に参加してもいいですね。何でも教えて下さい。よろしく。

…杉山尚史…

‘なおふみ’と読みます。二十歳です。趣味は旅行で、去年は南紀、四国、福岡、北海道（２回）、広島、金沢、東京、イタリア、ギリシャ、エジプトなどに行きました。今年はどこにも行かず学校一筋でいこうと計画だけしています。こんな私ですがどうぞよろしくお願いします。

…津田朋一…

“つだともかず”と申します。よろしく。よく「変な奴」とか「えっち」とか言われますが、それほどヘンでもないし、えっちでもありません。百聞は一見に如かず…詳しく知りたい方は本人まで。一見すればすぐに判ります。

… 原　潤 …

昭和47年７月、福岡県宗像郡福間町生。12才で奈良市大安寺に転居。以後県立奈良高校を経て平成４年、京都大学経済学部入学、今年度より文学部へ

編入。現在は、京都市東山区に下宿、仕送りがなくアルバイトと学校の両立に多忙です。趣味は読書、映画鑑賞、山登りなどです。

…平井素子…

はじめまして。石川県から来ました。文学部の中でも比較的実社会に結びついている所にひかれて地理学を選びました。人間と地域環境との関わりについて学びたいと思っています。趣味はスキーです。よろしくお願いします。

…松島文子…

大分雄城台高校出身。博物館・美術館を巡ったり、オルドス秘宝展などのデパートの企画物に出かけることが好きです。私は地名の読み間違いが多いのでよく恥ずかしい思いをしますが、これから頑張って行きたいと思います。

…山口秀樹…

はじめまして。昭和48年３月25日生、神奈川県藤沢市出身。趣味は鉄道です。又、敬虔ではないですがクリスチャンです。ずう体はでかいけど運動はからきし苦手です。皆様よろしくお願いします。

…山村亜希…

最近下宿が西院から北白川へと移り、ずい分大学に来やすくなりました。性格的に熱しやすいので好きなことはころころ変わりますが、今はテニスが好きです。勉強にも熱を入れようと思うこの頃。よろしくお願いします。

…渡辺　純…

今日、偶然同姓同名の男性に会いましたが、私は女性です。静岡育ちののんびり屋ですが、どうぞよろしくお願いします。漠然とですが自然に興味があります。

【聴講生】

…今里悟之…

金沢大学では山岳部で野山を徘徊していましたが、高い所は苦手です。卒論の時は滋賀県の朽木村をふらふらしては、道端の地蔵を見て喜んでいました。一年後どこへともなく消えてゆかぬよう、心技体の充実に努めます。

【事　務】

…喜多野宣子…

事務を担当しております喜多野と申します。自宅は奈良市、奈良公園の近くなので朝、家を出た時たまに鹿にぶつかることがあります。専門は食品化学だったのですが、最近奈良県の商家の年中行事に興味を持ちはじめ、食生活を中心に調査を進めていきたいと考えています。週３日（火、木、金）は事務仕事に専念しますので、宜しくお願いいたします。

また、昨年度の学部卒業生、大学院生の就職先、進学先等は以下のとおりです。

・学部卒業

合屋　有希	
近田　知子	
水野　真彦	大学院文学研究科
宮原　耕一	広島銀行
森口　弘美	社会福祉法人「たんぽぽの家」
山口　岳夫	東京都教員

・博士課程

豊田　哲也	京都大学人間環境学研究科

●１９９４年度講義題目●

＊講義＊

教授	成田孝三	人文地理学序説
〃	金田章裕	地域環境学概論

＊研究＊

教授	成田孝三	都市発展段階論
〃	金田章裕	古地図と景観史
東南ア研教授	応地利明	空間認識と地域研究
人環研教授	足利健亮	歴史地理学における資料批判
〃	青木伸好	地域構造の比較研究の方法
〃	山田　誠	日本近代都市の地理的諸相
理学部教授	岡田篤正	自然地理学：地形学
講師	山野正彦	現象学的地理学
〃	狩野　久	飛鳥時代政治史の研究
〃	安渓遊地	西表島から世界が見える(集中講義)

＊演習Ⅰ＊

教授	成田孝三	地理学研究法　Ⅰ
〃	金田章裕	〃　Ⅱ

＊演習Ⅱ＊

教授	成田孝三	人文地理学の諸問題
〃	金田章裕	

＊講読＊

講師	高橋　正	フランス地理書講読
人環研助手	豊田哲也	ドイツ地理書講読
人文研助手	石川禎浩	中国書講読

＊実習＊

講師	森　三紀	地理学実習
〃	松田隆典	

＊大学院演習＊

教授	成田孝三	地域の諸問題
〃	金田章裕	

＋事務局から＋

地理学談話会1993年度会計報告
(1993年4月～1994年3月)

【資金会計】　(単位、円)

収入	年会費	265,300
	繰越金	340,149
	計	605,449
支出	運営費への振替	172,465
	次年度へ繰越	432,984
	計	605,449

【運営費会計】

収入	資金会計からの振替	172,465
	秋季懇親会会費	98,000
	春季懇親会会費	115,500
	計	385,965
支出	秋季懇親会経費	74,984
	論文発表会経費	153,294
	会報等印刷	59,760
	通信・文具費	96,327
	その他経費	1,600
	計	385,965

－ 訃報 －

前回の「会報」発行以降、次の方々が亡くなられました。つつしんで御冥福をお祈りいたします。

確認分、カッコ内の数字は卒業年、敬称略。

兼子　俊一(S10)1993.12
喜多村俊夫　1993.10
西田和夫(S16)1994.2

－ お知らせ －

◎以下の会員の方々の住所が不明です。ご存じの方は談話会事務局まで御一報下さい。（数字は卒業年、敬称略。）

尼子　雅一(S62)	生田　博文(S51)
池内麟太郎(S48)	石角　強(S45)
出原　乗(S34)	今井　平八(S19)
岡本　靖一(S42)	岡本美津子(S62)
河口　隆洋(S56)	坂根　伸治(S63)
指尾　喜伸(S63)	都子　皇(S15)
飛田　雅孝(S49)	西沢　仁晴(S49)
野田　茂生(S36)	長谷川正雄(S52)
林　洋子(S40)	福田　新一(S46)
松本　弘史(S58)	森木　隆浩(S62)
山口　一郎(S55)	山下　和久(S57)
山田　憲子(S45)	小口　稔(H2)

京都1200
伝統と創生
シンボルマーク

教室からのお知らせ

地理学教室では何回かの文学部博物館の企画展を実施してきました。その際に作成した『近世の地図と測量術』、『三都の 古地図』の図録が若干残っています。ご希望の会員にお送り申し上げますので、二冊の場合は３９０円、どちらか１冊の場合は２７０円分の切手と同封して研究室宛にお申し込み下さい。

編集後記

会報の発行が遅れまして申し訳ございません。会報の内容、形式などについてご意見、アドバイスがございましたら、どうぞお知らせください。

：谷口美都子、喜多野宜子

会　報　第5号
発行日　1994年6月20日
発行者　地理学談話会
〒606-01
京都市左京区吉田本町
京都大学文学部地理学教室内
TEL 075-753-2793（直通）